volume 128

変わる日本の「暮らし」と「まち」

若い感性を生かし団地を、まちを、活性化する

福岡県北九州市　沖台二丁目団地
九州工業大学×UR　連携プロジェクト
2021年●令和3年〜

阿部民子 text by Tamiko Abe
illustration by Shigeyuki Sakata

北九州市のほぼ中央に位置する戸畑区。経済や商業の中心地である小倉北区の隣という利便性がありながら、落ち着きのある「文教のまち」として、子育て世代にも人気のエリアだ。

まちの文教の核となっているのが、九州工業大学だ。起源は官営八幡製鐵所操業時代の明治専門学校。開学110年を超える、日本有数の歴史を誇る大学である。

2021年、九州工業大学大学院工学府は、同じ戸畑区に建つ沖台二丁目団地を管理するUR都市機構と連携協力に関する覚書を交換した。大学と団地とは意外な組み合わせだが、二者が連携を結んだ目的は？　そして成果とは？　ユニークな協力の行方を追った。

○若い感性で団地住戸をリノベ

JR小倉駅から約7分の戸畑駅。そこから徒歩13分の場所に建つ沖台二丁目団地。URの入江冴香は、連携の経緯を「団地の管理開始は1984年。建物の経年化と居住者の高年齢化が課題となるなか、若い方々のアイデアを取り入れて団地や地域の魅力を高められないかと考え、九工大との連携をお願いしました」と説明する。

今回のプロジェクトでは、九工大生に沖台二丁目団地の住戸リノベーションアイデアを募集。テーマは「『文教のまち戸畑』でおすすめの子育て向け住宅」。最優秀賞作品はUR賃貸住宅として実際に商品化する。対象となるのは、昭和50〜60年代に多く供給された、ダイニングに窓がない、通称行灯（あんどん）部屋と呼ばれる間取りで、URが新たな魅力を模索しているものだ。

九州工業大学大学院工学研究院の徳田光弘准教授は「大学としても、実際の団地を教材にすることで、より実践的な教育を行うことができると考えました。1年目の2021年は、沖台二丁目団地を対象にリサーチを行いました。その結果、特急停車駅まで徒歩圏内と利便性が高く、家賃も手頃、風が通り、気候風土的にもよい、とポテンシャルが高いことがわかりました」と話す。

2年目の2022年に行われたコンペには、個性豊かな19作品が参加。当初の施工予定は最優秀賞1戸のみだったが、レベルの高さに、優秀賞も施工する、といううれしいおまけまでついた。

最優秀賞は工学府工学専攻建築学コース修士1年の東英和さんの『暮らしを整える　〜ワーカブルクローゼットのある暮らし〜』。

「窓のない行灯部屋を、収納や仕事部屋、将来は子ども部屋としても使える〝ワーカブルクローゼット〟に改造しました。壁面は自由にDIYできるフリーアレンジウォールなので、家族でフレキシブルに用途を変え、暮らしを楽しんでもらえたら」と東さん。

評価のポイントを、URの入江は「ネーミングも含めて、未来の新しい暮らしが提案できている。クローゼットの扉を透明にして、仕事や家事をしながら子どもの様子が見られるなど、細部まで考え抜かれている点も高評価につながりました」と話す。

優秀賞を受賞したのは、工学部建設社会工学科建築学コース4年、物部果穂さんの『長ベンチがつなぐ暮らし』だ。南北の開口をつなぐ軸を〝家族団らん軸〟と名づけて、長いベンチを設けたのが最大の特徴。座るだけでなく、家事机や食卓、勉強机にもなり、ここを軸に家族で集い、楽しく住んでもらえたらという斬新なアイデアに、「残念ながら、URではこの発想はでてこない」と高い評価を集めた。

右／最優秀賞の『暮らしを整える　〜ワーカブルクローゼットのある暮らし』
左／優秀賞を受賞した『長ベンチがつなぐ暮らし』

施工期間中は2週間に1回工事現場に通ったという物部さんは「予算や間取りなどの制約がある中で商品価値のあるものを考えるのが、楽しかった。商品化に向けてUR職員の方のアドバイスをいただくなど、実践的で勉強になりました」とキラキラした目で話す。

学生を指導してきた石塚直登助教は「学生のアイデアが行灯部屋の処方箋になれば、団地の価値向上にも役立つのでは」と期待を込める。

○まちの顔、外壁塗装にも協力

審査を振り返り、UR団地マネージャーの大川内将至郎は「今回のプロジェクトでは、UR側にも多くの気づきがありました。例えば、若い方は和室を好まないのではとの固定観念がありましたが、最終選考に残った5作品は和室をフレキシブルなゆとり空間として生かしていて、新鮮でした」と話す。

同じくURの宇井えりか担当課長は「5年後10年後には、今の我々の発想ではなく、むしろ、今の学生さんが考える子育てがスタンダードになるのでは。将来を見据えたそんな発想を、興味深く拝見しました」と感想を述べる。

学生提案のリノベーション住戸が3月に入居者を募集したのに続き、現在進行中なのが外壁色彩計画提案だ。

2024年度予定の沖台二丁目団地5棟の外壁修繕に合わせ、九工大生が色彩計画を検討する。プロジェクトに参加している工学府工学専攻建築学コース修士1年の髙田拓実さんは「外壁は一度塗装するとおよそ20年は残ると聞いています。将来、子どもに『パパが考えた』と言えるな、と。沖台の地名に由来した『風と水の流れ』というコンセプトにふさわしいデザインを考えたい」と意欲を語る。

学生の新たな感性を加えて蘇る沖台二丁目団地。その未来が楽しみだ。

街に、ルネッサンス
UR　UR都市機構
東北の復興まちづくりに 全力で取り組んでいます

［企画制作］新潮社